
実況パワフルプロ野球～甲子園を目指す少年少女～

三好八人衆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実況パワフルプロ野球〜甲子園を目指す少年少女〜

【Nコード】

N2306S

【作者名】

三好八人衆

【あらすじ】

リトルシニア日本代表チームの正捕手・片倉渚は、甲子園出場を目指す野球少女・橘みずきにスカウトされて聖夕チバナ学園に入学する。

これは、野球部すらなかったところから甲子園を目指す少年少女の物語である。

この作品はオリジナル設定があります。

プロローグ

「ツアアウト！しまつていこー！」
「オーツ！」

9回裏、ツアアウト。リトルシニア世界大会決勝戦、日本代表対アメリカ代表の試合は日本がリードして最終回を迎えた。

日本代表チームの捕手としてチームを牽引してきた片倉渚は、ナインに声をかけて気合を入れさせて定位置に戻り、バッターを迎えてマウンド上でこちらのサインを待つ日本チームの守護神・榎豊えのきよたかにサインを送る。

（ほ〜・・・相変わらず強気のサインやな）

女房役の可愛い顔に似合わない強気のサインに感心しながら、榎は振りかぶってその左腕を唸らせた。
「ツ！？」

重たい音を立てて渚が構えたミットにボールが吸い込まれる。相手打者が驚愕するそのコースは 『ど真ん中』。

（このバッターは、まず初球は振ってこない・・・労せずしてワンストライクが取れるんだ）

次のサインを送り、再び榎の左腕が唸る。投じられたのはカーブ。初球に重い剛速球を見せられた残像が残っていたのだろう、完全にタイミングを外されてバットは空を切る。

（榎、相手さん驚いてるね）

（フッフ、ワイの剛速球を見せられた後のカーブやさかいな）
アイコンタクトで会話を交わし、最後のサインを送る。

（おい、ええんか？そんな球で・・・まあ、ええやる）
振りかぶり、左腕から最後の球が投じられた。その最後の球は、バッテリー以外を驚かせるものだった。

唸りをあげる剛速球でも、打ち気を逸らすカーブでもなく
フワフワと宙を舞う、超スローボールであった。

(これは見逃せばストライクですよ、バッターさん?)
マスク越しにバッターを見てみれば、彼は困惑した様子でボールを見つめている。そして
バットの根っこで叩いた打球は、渚の真上上がった。マスクを捨てて捕球態勢に入る。
重力に従って落ちてきた白球をミットに収めた瞬間、歓喜が爆発した

その数ヶ月後。中学を卒業して高校生になった片倉渚は、数多の名門・強豪野球部を擁する高校からの誘いを断って聖タチバナ学園高等部の制服に袖を通していた。

「うん・・・いい天気だなあ」

朝の陽ざしを浴びて気持良さそうに伸びをする小柄な少年。黒髪の癖っ毛が特徴で、時々女の子に間違えられる事もある整った顔立ち

彼が片倉渚であった。

入学式が終わり、振り分けられた教室で一息ついていると、渚は隣の席の少年に声をかけられた。

「おいらは矢部明雄やへあきおでやんす。よろしくでやんす」

奇妙な語尾で語りかけてきたその少年は、グリグリメガネが特徴でいかにも『オタク』という感じの人物であった。

「僕は片倉渚。これからよろしく、矢部君」

（なんだか、気の合いそうな人だな・・・）

いきなり友人になれそうな人物と出会って、内心ほっと溜息をつく渚。2人はしばらく中学の事などをネタに話をしていたが、矢部がこの話題を切り出した。

「ところで片倉君はここで何部に入るでやんす？」

聖タチバナ学園は『文武両道』を旨にしており、全学生は必ず文化・スポーツの何かの部活に入らなければならない。

「ええつと・・・」

渚が彼に応えようとした、その時　スパーンツ！と教室の引き戸が開き、そこからひとりの少女が姿を現した。

サイドテールにした水色の髪に、勝気そうな印象の瞳に整った顔立ちの美少女であった。入学初日でありながら、彼女の名を知らない生徒はいない。

「か、片倉君。橘みずきたちほなでやんすよ！理事長の孫娘にして入学生総代の！」

「・・・うん、知ってる」

彼女の名は橘みずき。矢部の紹介通り、理事長の孫娘にして入学生総代を務めたほどの才女である。噂によれば、入学試験の問題をすべて100点で突破したとか。

彼女は教室内をキョロキョロと見渡し、誰かを探しているようだった。渚は身体を縮めて身を隠すという無意味な事をやっていた。

「あー！渚君、いつまで教室でだべってるのよー！」

彼女がズカズカとこちらに向かって歩いてくる音と、クラスメイト達の視線、そして「渚君・・・？」「橘さんって、片倉君とどんな関係なんだ・・・？」とかいうヒソヒソ話が彼の耳を突く。

観念して顔を上げると、そこにはつい数ヶ月前に現れて渚の進学先を決めてしまった少女の姿があった。

「・・・久しぶり、橘さん」

「あつ、まだそんな他人行儀な口きくんだ」

そして彼女が次に言い放った言葉が、彼を一躍学校中の有名人にする。

「フィアンセ婚約者に向かって」

片倉渚。

後に高校野球界にその名を轟かす彼の高校生活は、なんとも前途多難な幕開けであった。

「プロローグ？」

橘家の邸の大きな自室で、橘みずきは自分の大きな机の前で溜息をついた。

「断られ続けて7人目か・・・」

彼女の机の上には数枚の書類が散らばっていた。これらはすべて、彼女が協力を求めて断られ続けた選手たちの情報が書かれた書類だった。

「はぁ・・・お祖父ちゃんに大見得切った以上、もうそろそろ見つけないといけないんだけどなぁ」

彼女は来春、高校生になる。進学先は祖父が理事長を務める聖タチバナ学園の高等部で、彼女はやりたい事があった。それは　　野球。

野球部員として、甲子園に出場する事が彼女の夢であった。

かつて、女性は高校野球の試合に出場する事が出来なかった。しかし、10年近く前にそれが覆ったのだ。恋愛高校れんれんの野球部員たちが、共に甲子園を目指していた仲間の少女を再びグラウンドに戻す為に活動を行い、世論を動かしたのだ。

現在では恋恋高校から史上初の女性プロ野球選手となった早川はやかわあおいを追って、甲子園を目指している野球少女は増えており、みずきもそのひとりだ。

しかし聖タチバナ学園には野球部はない（部員3名の野球愛好会はある）。それを彼女は仲間たちとともに、いちから立ち上げようと

しているのだ。

その為に彼女は野球経験のある部員をスカウトしているのだが、ひとりとして彼女や、彼女の仲間達の誘いに乗った者はいなかった。やはりリストアップしている選手は総じて強豪校からの誘いが来ているし、そもそも野球部すらない聖タチバナの誘いなど歯牙にもかけられなかった。

元々そんな事もあって、後継者と期待する孫娘の野球部設立に反対していた祖父だが、彼女は設立に当たって2つの条件を出したのだ。ひとつは『進学コースの入試試験科目を、すべて100点でパスする事』

もうひとつは『自分（祖父）を納得させるだけの（野球の）実績を
持った選手を最低一人はスカウトする事』

入試試験については自信があった。しかし、問題は2つ目の条件である。彼女が目をつけたのは、夏に行われたリトルシニア野球世界大会の日本代表のメンバーだ。本戦に登録された選手20名の選手のうち9名をリストアップしたのだが、結果は悉く惨敗。しかし、諦めるわけにはいかない。明日もスカウト活動に向かうのだ。

「まだ時間はあるんだから・・・ええっと、明日は・・・」
散らばった書類の中から、一枚の書類を見つけ出す。

「代表チームの正捕手『片倉渚』君か・・・」

渚の家は、近所でも有名な小料理屋だった。和服を着た店員らしき女性に案内された部屋にはすでに先客がいて、みずきを出迎えてくれた。

「あらあら、随分と可愛らしいスカウトさんですね」

「はじめまして。聖夕チバナ学園の橘みずきと申します」
みずきを出迎えたのは、ニコニコと柔和な笑みを浮かべた和服が似合う女性だった。みずきは丁寧にお辞儀をし、改めて目の前の女性を観察する。

（お姉さん・・・なのかしら？すっごく若くて綺麗な人・・・）
ざっとみて20代半ばだろうか。自分の姉と同じぐらいの年齢に見えた。

「では奥様、お茶をお持ちいたします」

「はい。お願いしますね、石田さん」

（奥様！？って事がこの人が　　）

「はじめまして、橘さん。私が片倉渚の母で薫子と申します」

「なるほど・・・橘さんの野球への熱意はよく解りました」

みずきが持参した学校案内のパンフレットを脇に置いて、みずきの話に聞きいつていた薫子は、彼女の話をつまみ締めるように首肯した。

「でも・・・なんでうちの渚を選んだのですか？私は野球をあまり知らないですけど、あの子の身体は小さいし、選手としての魅力には欠けると思うのだけれど・・・」

確かにみずきも、書類のデータだけをみる上でははっきり言って捕手には向いていない体格だと思っていた。

しかし　足を運んで実際にプレーしている姿や、映像を見ているうちにその評価は覆ってしまった。

大柄な選手の本塁突入の突進にも逃げずに、吹き飛ばされても小さな体で本塁を守る勇敢さと失点を許さない鉄壁のブロック。

相手走者を刺す強肩と、送球のコントロールの正確さ。

投手の良さを生かし、相手の弱点を突くリード。

チャンスに強く、力強いバッティング。

そのプレーに惹かれたのだ。

「一目惚れ・・・って言うんでしょうか・・・」

「あらあら」

それ以来、なぜか彼の姿を見るたびに胸が高鳴り、落ち着かなくなる。戸惑った様子のみずきに、薫子は笑みを浮かべた。

その後の展開はあつという間だったなあ、と彼女に引きずられながら渚は振り返ってみる。母は帰宅した渚にみずきを紹介し、聖タチバナに進学するよう勧めたが、渚にとつてこれは意外な事であった。今まで野球部からのスカウトを『進学はあの子が決める事ですから』と断り続けてきた母が聖タチバナで野球をやるよう勧めたのだから渚は『あの人』に憧れて野球を、キャッチャーを始めた。前に聞いた話では、『あの人』もみずきと同じように野球部をいちから立ち上げたらしい。

出来たてのチームでやりがいがない、と言えば嘘になる。強豪校で野球をやることにもやりがいはあるだろうが、それ以上に何もないところから甲子園を目指すという事にそれ以上のやりがいを感じたのだ。

そして、現在。彼女の祖父だという理事長の前で紹介され、野球部を設立する事になったのだが、なぜか彼女は渚を『婚約者』として紹介したのだった。ちなみにもっと驚いたのは『婚約者』のくだりが、すでに彼女が母に伝えていた事だ。

後々聞いたところによると、どうやらみずきには祖父が決めた婚約者がいたそうだが、彼女はその人物が嫌いらしく、『形だけでも』ということだった。

（まあ、橘さんも困っているみたいだから、付きあうのも悪くない

かな・・・)

どうやらみずきが困っているようなので、とりあえず婚約者として振舞う事になっている。

「渚君急いで！もうみんなグラウンドで待ってるんだよ！それと私の事は『みずき』って呼ぶ事！」

「ま、待ってよ〜」

主人公とオリジナル選手設定

片倉渚（右投げ右打ち）

今作の主人公。小柄な体格に癖った毛になった黒髪が特徴。強肩強打堅守と三拍子そろった捕手で左右に打ち分ける広角打法が持ち味。中学時代にリトルリーグ世界大会の日本代表に選ばれ、正捕手としてチームを優勝に導いた。のんびりした性格で、日向ぼっこが大好き。

家は地元でも有名な小料理屋で、家族は両親と妹。

田中誠（左投げ左打ち）

野球部設立以前の愛好会から所属していた2年生で、ポジションはファースト。長身でボーっとしていることが多いのんびりした性格だが、190センチ後半の身長と柔らかい股関節を駆使した守備は秀逸でバントも上手い。彼女がいる。

モデルは横浜大洋ホエールズ（62〜80）東京読売ジャイアンツ

（81）で活躍した松原誠氏。まつはらまこと

浜名龍彦（右投げ両打ち）

野球部設立以前の愛好会から所属していた2年生で、ポジションはショート。背が小さく、子供っぽい性格で中学生にも間違えられることもしばしば。部内一の俊足だが、打撃に安定性がない為、いまいち生かし切れていない。

モデルは福岡ダイエーホークス（92〜01）ヤクルトスワローズ

（02〜03）千葉ロッテマリーンズ（04）で活躍した浜名千広はまなちひろ氏と横浜ベイスターズ（99〜）に所属している金城龍彦外野手。きんじょうたつひこ

峰新太郎（右投げ左打ち）

野球部設立以前の愛好会から所属していた2年生で、ポジションは

センター。「くっす」が口癖。渚曰く「地区でも十本の指に入る好打者」であり、選手としての総合力も高いがチャンスに弱く、大事な場面でのミスが多く精神面の弱さが欠点。彼が強豪校に誘われなかったのはこのあたりが理由である。

モデルはヤクルトスワローズ（72～90）で活躍した水谷新太郎みずたにしんたろう氏。ちなみに氏の現役時代のポジションは内野手（遊撃手）である。

藤堂雄二（右投げ右打ち）

みずきとは中等部からの知り合いで、それが縁で野球部に入部した。ポジションはサード。本人は強引に入れられてしぶしぶやっていると公言しているが、練習熱心で見えないところで努力をしている。中等部時代はボクシングジムに通っていて野球は素人。その為試合ではエラーや三振が多いが、一発長打を秘めている。

モデルは東京読売ジャイアンツ（90～96）大阪近鉄バファローズ（97～04）東北楽天ゴールデンイーグルス（05～08）又エボラレド・オウルズ（メキシカンリーグに所属するチーム。09）で活躍した吉岡雄二氏よしおかゆうじ。

奈良原幸雄（右投げ右打ち）

学内でも1・2を争う秀才。野球に関しては全くのど素人で、運動も得意ではないが、ある目的の為に野球部に入部する。ポジションはショート・セカンドだが、今のところ控え要員。

根性はチーム1であるが、いかにせん経験値がまだ浅いうえに、彼のポジションには原・浜名という名手がいるためしばらく彼の出番はなさそうだ。

モデルは西武ライオンズ（91～97）北海道日本ハムファイターズ（98～06途中）中日ドラゴンズ（06）で活躍した奈良原浩ならはらひろし氏と北海道日本ハムファイターズ（86～07）で活躍した田中幸雄氏たなかゆきお（内野手）。

独自設定

- ・みずきは野球を禁じられていない。
 - ・野球部に太鼓以外の選手がいる。
- 等々、オリジナルの設定がいくつもあります。

〜1年目4月?〜

新生聖タチバナ学園高等部の野球部には、愛好会時代からの部員が4人。今回渚も含めて数人の新入部員がいた。

愛好会からの部員、つまり2年生はキャプテンを務める太鼓望たいこのぞむ、スタミナ抜群の右投手に長身で守備の上手い左打ちの一塁手田中誠たなかまこと、俊足堅守でスイッチヒッターの遊撃手浜名龍彦はまなたつひこ、三拍子そろった巧打の外野手峰新太郎みねしんたろうの4人に新入部員が8人で12人となった。

新入部員は渚とみずきの他に、みずきとともに野球部設立に尽力した二塁手の原啓太はらけいた、投手の宇津久志うつひさし、そして外野手の大京均だいきょうひとし。

その他の選手は

「ったく・・・めんどくせえ・・・」

数日経った今でもブツブツ不服そうに呟きながら練習をしているのは、三塁を守る事になった藤堂雄二とうどうゆうじ。渚のクラスメイトで、授業ではサボりの常習犯。中等部の出身で、本当は帰宅部のつもりだったそうだが、みずきと知り合いだったのが運のつき。『藤堂、アンタどうせ暇なんだから野球部入んなさい』と強引に入部させられたのだという。しかし文句ばかり言う割に練習を休まない彼は、意外と真面目なのかもしれない。

「ええつと・・・内野手がゴロを取って二塁ベースに送球、そして二塁ベースで取った選手が一塁手に送球して一度にアウトを2つ取る事を『ダブルプレー』、もしくは『併殺打』という・・・」

ベンチで野球参考書を片手にルールを確認しているのは、内野手になる事になった奈良原幸雄ならはらゆきお。学園2位の成績を誇る秀才だが、運動は全くやった事がなかったらしい。もちろん野球も全くの無知で、まずはルールの確認をさせているのだ。

そして

「おい、片倉君。ボール投げ返してくれでやんすー」

「あ、ごめんねー」

いま、渚のキャッチボールの相手になっている外野手の矢部明雄。総勢12名が新生聖タチバナ学園高等部野球部のメンバーである。

そして彼らを束ねるのが、新任の女性教師・市川光先生いちかわひかるである。ほんわかした雰囲気いの24才で、豊かな胸と保護欲を誘う童顔で男子生徒の人気を集めている先生だ。

しかしこの先生、運動神経を母親の胎内に置き忘れてきたかのような運動音痴でよく転ぶ。

「きゃんっ!」

「・・・ああ、また光ちゃんが転んじゃった」

出来たばかりの聖タチバナ野球部には専用グラウンドはない。女子ソフトボール部と兼用して使用しているのだが、早くもソフトボール部側からクレームが出だした。

彼女達は全国大会の常連の強豪で、いまの時期も全国大会に向けて新入生を鍛える重要な時だ。その時期を野球部に取られたのが不服のようで、併用を了承した部の顧問や野球部の顧問である市川先生にクレームを付けているという。

「私達は本気で全国を目指しているの!理事長の孫の特権をかざして、野球ごっこしてる人に練習時間とグラウンドを取られたくありません!」

それが練習中にグラウンドに怒鳴りこんできたソフトボール部キャ

ブテン・栗原由香くしはらゆかの抗議だった。それに真っ向から受けて立ったのは、みずきだった。

「私だって、一時の気まぐれで野球を始めたんじゃない！本気で甲子園を目指しているんだから！」

「……ふうん。じゃあ、橘さん。あなた達の本気を見せて頂戴よ」
「……勝負つて事？」

由香は肯き、勝負のルールを告げた。

『両部のバッテリーと代表の打者がそれぞれ5打席対戦して、ヒットを多く打った方が勝ち』

「あなた達が負ければ野球部は解散。万が一にもあなた達が勝てば、グラウンドの併用を続けましょう」

「試合はいつよ？」

「そうですね……4月の4週目の日曜でどうかしら？」

「ええ、いいわよ……！」

女2人の迫力に圧倒されておろおろする野郎どもを脇目に、由香とみずきが火花を散らしながら別れていく。

高笑いをあげながら立ち去る由香を見送って、渚はポツリとつぶやいた。

「……あんな高笑いをあげる人、本当にいるんだ」

〜1年目4月?〜

片倉家は市内でも評判の小料理屋である。無口だが腕は確かな料理人の父・十蔵じゅうぞうと美人と評判ながらも腕っ節は強い母・薫子かおるこ。その2人の間に生まれた片倉家の兄妹は近所でも噂の兄妹であつた。

兄・渚の方の評判といえは、近所のご婦人がたは口をそろえてこう言う。

「渚ちゃんは本当に可愛いわね〜」

「ほんと、うちの息子の嫁に来てくれないかしら〜」

体格も小柄で、よく女の子の間違えられていた渚は昔からご婦人がたに『可愛い可愛い』と評判であつた。

一方、妹・湊みなとの評判といえは

「ねえ和田さん聞いた?湊ちゃんったら、また痴漢を撃退したんですつてよ」

「相変わらず勇ましいわね〜。そういえば桧山さん、私この間渚ちゃんを背負つてお家に帰る途中の湊ちゃんを見たわよ〜」

背丈はすでに兄に追い付いており、幼いころから空手をやっていたため腕っ節が強い湊は、面倒見もよく、のんびり屋の兄・渚の面倒をよく見ていた。

「そういえば渚ちゃんに彼女ができて以来、湊ちゃんの機嫌が悪いわね〜・・・」

「ふ、あゝあ・・・」

渚の朝は早い。朝のランニングに出かけるために朝日が昇る頃にはジャージを着て家を飛び出している。

「あ、父さんおはよう!」

「・・・おっ」

出かける前に、調理場で仕込みをしている父への挨拶を忘れない。町内を一周してシャワーを浴びて汗を流した後は、母が作る朝ご飯が渚を待っている。基本的に朝は早い片倉家だが、唯一妹の湊だけは朝に弱く、渚が朝食を食べる6時30頃に彼女が起き出す事はまずない。

「母さん、お弁当作るから台所空けておいてね」

「はい」

洗顔と歯磨きを終えて身だしなみを整えると、渚は台所に立って弁当作りを始める。

「昨日は鶏肉を使ったから・・・今日は牛肉の炒め物をメインにしてみようかな」

鼻歌交じりに腕をふるう渚は、自分と妹の湊、そして婚約者（暫定）のみずきの分を毎朝作る。

3人分の弁当を作り終えた頃、大欠伸をしながら学校の制服を纏った少女がリビングに現れた。渚の妹である湊である。

「おはよ～・・・兄貴」

「おはよう、湊」

まだ眠気が取れないのか、目を擦りながら現れた彼女はテーブルに置かれた三つの弁当箱を見やって顔をしかめた。

「兄貴・・・またあの女の分も作ってんの？利用されてるだけなんだから、そんな世話焼かなくていいんじゃないか？」

湊は正義感の強い娘だ。母の手前、みずきについて何も言わないが、兄を利用する彼女に対していい感情は持っていない。

「湊、みずきちゃんだって困っているんだから、そんなに悪しざまに言うものじゃないよ」

「はいはい・・・まったく、兄貴は頑固なんだから・・・」

「なんかねー、納得いかないのよ」

昼休みの屋上のベンチに腰掛けるみずきは、同じく隣に腰掛けて弁当を広げる渚にぼやいた。

「なにが納得いかないの？みずきちゃん」

「ねえ渚君。私達つて学内では恋人同士として通ってるじゃない？」

『理事長の孫娘である橘みずきの婚約者は片倉渚』 この情報

はその入学初日の内に学内を駆け廻り、翌日には2人は学園内で一番有名な恋人同士になったのだった。

「だから、恋人同士として普段から振舞うべきだと思つたのよ」

はいこれ、と彼女が渚に手渡したのは2枚の手ケット。

「これ・・・キャットハンズ戦の手ケット？」

「そ。今夜その市民球場でキャットハンズ対カイザースの試合があるからさ、一緒にいこ？」

ね？と上目遣いで頼んでくる彼女にちよつとドキツとしながら、渚はうなずいた。

「うーん、そうだね。今日は練習も休みだし、行こうか」

東京猪狩カイザースといえば、エースに球界を代表する左腕・猪狩守を擁したチームである。豊富な資金力やフロントの全面協力のもと、毎シーズンオフのストーブリーグでは常に主役を張っており、強大な戦力でもってセ・リーグ3連覇中である。

一方の横浜キャットハンズは万年Bクラスの低迷中のチーム。打撃陣はいい選手がそろっているが投手陣が弱く、例年Bクラスに甘んじている。

試合は一方的な展開で進んでいった。カイザースの強力打撃陣がキャットハンズの脆弱な投手陣を打ち砕き、5回終了時点ですでに9

点差が付いていた。

「あーあ、今日も大差が付いちやったなあ・・・」

やや空席の目立つ内野席で、キャットハンズカラーのオレンジ色のメガホンを膝に乗せて溜息をつくみずき。

「みずきちゃんって、キャットハンズのファンなんだ？」

渚が聞くと、彼女は「んー」と考え込んだ後に、答えた。

「キャットハンズのファンっていうより、選手のファンかな」

渚がその選手の名前を聞こうとした時、球場に選手交代を告げるコールが響き渡った。そして、新たに登場する選手の名前を耳にしたキャットハンズファンの歓声がひときわ大きくなる。

ピッチャー、早川あおい。

アナウンスの後、レフトスタンドのキャットハンズファンは大歓声で三塁側ベンチから登場した選手を出迎えた。

緑色のお下げ髪と蒼い瞳が特徴の右腕。彼女こそ史上初の女性プロ野球選手・早川あおいである。

『球界一美しい』と評されるアンダースローから投げられるカーブと決め球であるシンカーの改良版『マリンボール』が武器の軟投派。この日も彼女は勢いに乗るカイザーズ打線を三者凡退に退ける。

「・・・ねえ、渚君。私、あの人が目標なんだ」

目線をあおいに向けたまま、みずきは語りだした。

「ずっと無理だっと思ってた。女がプロ野球選手なんて・・・って。でも、あの人は成し遂げた。それも人気だけの選手じゃなくて、ち

やんとプロの選手として通用しているってところを私に・・・いや、私達に見せてくれた」

早川あおいは今シーズンでプロ9年目。主に中継ぎ・抑えとして活躍し、5年目には『最優秀中継ぎ投手』のタイトルを獲得した。

彼女の活躍があり、今日、プロ野球選手を目指す野球少女達が増えているのだ。そして、野球少女達が高校球児として目指すのは、早川あおいも成し遂げられなかった『甲子園制覇』。

「私も、彼女みたいに野球選手を目指す女の子の目標になれるような選手になれるかな？」

「なれるよ、みずきちゃんなら・・・」

それはその場に合わせた台詞ではなく、渚の本心からくる言葉だった・・・

リムジンで球場まで迎えに来た橋家の車にみずきを乗せて送った後、渚は選手通用口に向かって歩き出した。選手と関係者以外入れないので、しばらく入り口付近で待っている。キャットハンズの手選手たちがぞろぞろと出ていき、しばらく経った後に待ち人は現れた。

「お疲れさまでしたー・・・あ、渚！お待たせ」

「久しぶり、あおい姉さん」

こちらの姿を見つけてパタパタと駆けよってきたのは、先ほどまでマウンドでプレーしていた早川あおいだった。

「みんな元気にしてる？」

「うん、相変わらずだよ。母さんも今日は姉さんの為に腕によりをかけて料理を用意してるって」

「やったあ！・・・そうだ、さつきはるかから『そろそろ駅に着く』ってメールが来てたんだ。旦那が車をまわしてくれるから、それに乗って駅まで行こう」

「・・・相変わらずお兄さんはパシリなわけ？一応、あの人チームの司令塔でしょ？」

あおいの夫もキャットハンズの捕手で、チームの頼れる司令塔である。弱小キャットハンズの中で、彼のリードと強打がチームを支えている。

「べ、別にいいんだよ。あいつは高校時代からボクのパシリだったんだからっ」

口では何気にひどい事を言うあおいだが、彼女が彼に感謝している事を渚は知っている。彼女が今、こうして野球ができるのは彼とあの仲間たちのおかげなのだから・・・

そして、彼女が彼にベタ惚れだという事も知っている。

(これがいわゆる『ツンデレ』っていうのかな?)

「そういえば渚、高校でも野球やるんだって？話聞かせてよ！」

「うん」

渚は語りだした。甲子園を目指す野球少女と出会い、野球部のない所から甲子園を目指すという事を・・・

「1年目4月？」

春の日差しが緑に染まった川原の土手に降り注ぐ。子供連れの親子がキャッチボールをしている日曜日ならではの風景。

柔らかな日差しと草の匂いに囲まれて昼寝をするのが、渚は大好きだった。

「ん……ん」

上体を起こしてノビをし、欠伸をする。この街は緑も多く、空気が綺麗だ。渚は立ち上がり、お尻についた草を払ってさて帰ろうかと歩き出した。

渚の帰り道には公園があり、その敷地内には野球場がある。渚も中学時代、試合をやった事があるグラウンドで、この日は中学の野球部同士の試合が行われていた。

父兄が観戦している横で、渚も試合を観戦する。先攻の水色の帽子のチームと、後攻の赤色の帽子のチームが対戦しており、スコアは九回表無死で3対1と水色の帽子のチームがリードしていた。

水色の帽子のチームは父兄の話を聞いているとなかなかの強豪チームらしく、選手たちの体つきも中々のものだった。対して赤色の帽子のチームのピッチャーは球威・コントロールともにさほど見るべきものはないように見えた。

（良くも悪くも普通の中学生ピッチャー……ってところかな。でも、この強打のチーム相手に2点に抑えているって事は何か秘密があるのか……）

渚が捕手目線でそんな事を考えていると、赤色の帽子のチームのキ

ヤッチャーがマスクを上げた。

「・・・女の子？」

ぽつりと呟いた渚の声が聴こえたのか、隣にいた選手のお母さんらしき女性が少し嬉しげに話しかけてきた。

「そうなのよ、あの子、うちの子のチームの選手なんだけど、ものすごく上手なのよ！」

「そうなんですか？」

「ええ！最近では女性のプロのピッチャーも出てきたし、あの子が野手でプロ入りしてくれたら、すごいと思わない！？」

興奮気味に話してくる女性に、渚は苦笑して「そうですね」とだけ返した。確かに話題にはなるだろうが、プロでは話題だけでは生きていけない。

（あの子の選手としての实力は、どんなものなんだろうな？）

（へえ・・・これは中々・・・）

渚は件のキャッチャーの实力に舌を巻いていた。スローイングについては平均よりすこし下といったところだったが、それを除く守備面には驚かされた。数球とんでもない暴投があつたが、すべてミットで受け止めてみせたのだ。

（打者としての实力はどうなんだ？）

九回裏の攻撃。一死後二塁打が飛び出してチャンスを作ると、捕手の少女が打席に入った。どうやら3番打者らしい。2球、きわどい球が来たがそれを見送ってツーボール。選球眼はいいらしい。

そして3球目、ストライクを取りに来た球を彼女は振り抜いた。打球は一塁線を突破。長打コースだ。

（流し打ちだ！上手い！）

二塁からランナーが還って3対2。あまり足は速くないらしく、長打コースにもかかわらず彼女は1塁にストップ。

ここまで見た渚は、踵を返して家へと向かった。

「六道聖ろくどうひじりさんか・・・3年生だから、来年は僕らの高校に入学してくれるといいなあ」

しかし、その前に来週行われるソフトボール部との対決に勝たなければならぬ。負ければ野球部は廃部だ。

「決戦は来週・・・か」

「1年目4月？」

ついに、その日はやってきた。聖夕チバナ野球部存続をかけて、ソフトボール部の主砲・栗原由香との対決の日である。オレンジを基調にした真新しいユニホームに身を包んでみずきを先頭に現れた野球部員を見て、由香は鼻で笑う。

「あらあら・・・今日でもう野球部は終わるといいうのに、ユニホームまで作るなんて、なんて無駄な出費でしょう」

「フフン。私達の歴史がこれから始まるというのに、戦闘服であるユニホームがなきゃ締りがないでしょ？」

お互い睨みあう2人の少女。しかしその睨みあいはずぐ終わり、ルールの確認を行う。

「お互い代表の打者だけが打席に立ち、相手チームのバッテリ、及び守備陣と対決する。ヒットは1点、二塁打が2点、三塁打が3点、ホームランが4点。エラーはそのチームにマイナス1点」

「5打席終了時点で得点が多い方が勝ち。以上でいいですね」

じゃんけんの結果、先攻は野球部。ソフトボール部が守りにつき、野球部代表バッターの渚が打席に入る。

(別府さんはコントロールが武器のピッチャーだ)

昨日、みずきの家で見せられたソフト部のエースの映像を思い浮かべながら、渚は足場を固める。

(気を付けなきゃいけないのは浮かび上がる球・・・ライズボール。野球にはない変化球だから、これをどう打ち崩すか・・・だね)

「バット一回も振らないで三振するって……あいつら勝負する気あんの？」

ベンチに戻ったソフト部のエース・別府杏里べつぷあんりは、呆れた様子でベンチに腰を落とした。相手打者の片倉は一度も振る事なく三振してあっさりとベンチに戻ったのだ。あの様子を見て、部の存続がかかっているのにやる気があるのかどうかを疑わない方がおかしいだろう。

「あゝあ。さつさと終わらねえかなあ……」

その彼女の声にこたえるかのように快音が響き渡り、白球が外野フェンスの外へ消えていった。

第2打席の渚は9球粘ってサイドゴロ。由香は二塁打を放って0対6となった。明暗くつきりと分かれる展開に、打席に向かう渚を見る野球部員の目は不安に染まっていた。

「なーに不景気な顔しているのよ」

そんななかで、みずきはひとり明るく振る舞っていた。

「た、橘……あいつ本当に別府の球打てるのかよ!？」

「大丈夫だって、渚君が言ってたから大丈夫でしょ」

うるたえた様子の藤堂にも、むしろ笑みを浮かべながらみずきは答える。

「最初の2打席は様子見……むしろ打ってくれて助かったって言うってたわよ」

実はみずきも2打席目が終わった後、渚に問い詰めようとしたのだが、しかしマスクを取った渚は「もう好きに打たせやしないよ。弱点が読めた」と笑ったのだ。

(頼むわよ……)

打席に立った渚を見て、杏里は背筋に薄ら寒さを感じていた。

（なんだ・・・これ？まさか威圧されてる？このあたしが・・・！
？）

しかし、それはかつて全国大会でベスト8を取った彼女にとって許し難く、認めがたいものだった。

（い、いや。気のせいだ。こんなチンチクリンにあたしが打たれるわけねえだろうが！）

気合を入れなおし、構える。ウインドミルの美しいフォームで投げられた直球は　　あまりにもあっけなく快音を響かせ、彼方へ消えていった。

自信をもって投じたストレートが打たれて肩を落とした杏里同様、由香も先ほどとは違う面を感じていた。

（ストレート・・・カーブ！？）

バットには当たったものの、直球を待っていてタイミングが合わずにセカンドゴロ。カーブを2球続けて投じて見送って追いこまれたが、同じ球を3度続けて投げはしないだろう　　と直球を待ってのセカンドゴロ。

その後は裏をかかれ続け、由香の打球はスタンドはおろか外野にも飛ぶ事はなかった。

しかし、渚はホームランの後の打席で外野の間をぬく二塁打で同点に追いついたのである。

そして最終打席にも快音を響かせ、対決はあっさりと野球部の勝利に終わった。

渚達の住む街の片隅にある高級住宅街。その一角にある屋敷で、一人の男性が受話器を手に懐かしい相手と会話を交わしていた。男性は年の頃60才ほどで、穏やかな雰囲気の彼の通話の相手はかつての教え子であった。

「ふむ、君が野球部の顧問を・・・？聖タチバナ？・・・ふむ。まあ、私も妻にそろそろ次の職場を探すようにせつつかれました頃なんだよ・・・ああ、そうだ。受けさせてもらうよ。それではまた後日」

〜1年目5月?〜

アマチュア野球界関係者で『智将』森村昌也もりむらまねやの名を知らない者はいない。現役時代は社会人の名門チームで捕手としてプレー。33才で引退後は会社勤めの傍ら、チームの監督に就任。その後は社会人チームや大学野球、高校野球で複数のチームの監督を歴任し、幾度も栄冠に輝いた事がある名将である。

なるほど、と聖タチバナ野球部森村監督は呟いた。絵に書いたような素人チームだなと。真新しいオレンジ色のユニホームに身を包んでベンチに座っている彼の視線の先には、マウンド上で苦闘する2年生エース・太鼓の姿があった。

森村監督率いる聖タチバナ学園野球部はこの日、『地区最強』の呼び声高い帝王実業高校の野球部と試合を行っていた。とはいっても今大会も甲子園出場はおろか全国制覇の候補にも挙がっているチームの主力が一月前に結成されたチームと戦ってくれるわけがない。帝王実業の選手は今年入学してきた1年生が中心のメンバーである。帝王実業の守木監督まもしぎの狙いは実戦での新入生の実力チェックといったところだ。

試合は現在6回の帝王実業の攻撃中で15対1。友人であった両監督の試合前の決め事で『コールドなし』と決められている。だから聖タチバナがこの後30点取られようが50点取られようが試合は終わらないのである。

(橋が6失点、宇津が5失点、太鼓が4失点・・・そのうち自責点

はそれぞれ2点、1点、2点・・・トンネル・落球・悪送球などの単純なエラーに中継のミス、盗塁の際のセカンドベースのカバーの連携のミス、サインの見落とし・・・挙げればキリがないな）快音とともに打球が三遊間を・・・破った。16点目・・・とはいえ無理のない話だ。野球部は今春立ち上がったばかり。去年までは9人そろわず、試合すらできなかったのだから、試合ができるだけありがたいのかもしれない。

（試合経験・・・いや野球経験のなさが原因だな。ともかくこのチームは野球に触れるところから始めなくては）

「とゆーわけで！明後日からのGW期間中に野球部は合宿を行います！」
ゴールデンウィーク

帝王実業との試合で大敗した翌日の月曜日の部室内ミーティングで、みずきは高らかに宣言した。

「私も含めて昨日の試合でいっぱい課題ができたと思う。夏の予選に向けて、合宿で課題を克服したいと思います！」

試合終了後、学校に戻った夕チバナインは部室に集められて森村監督から宿題を言い渡された。

内容は『本日の試合における自身の課題を述べよ』。それぞれみんなが己の通学カバンの中に自分の課題が書かれた紙があるはずである。

「合宿ではそれぞれが挙げた課題の克服と、守備連係を中心に練習をしていこうと思う」

森村監督の目指す野球は『ディフェンス重視』の野球。3番大京・4番片倉頼りの打線をカバーする為には『1点を守り抜く』野球し

かないと考えるに至ったのだ。

「そーゆー訳だから！みんな明後日の10時までには駅に集合ね！」
みずきの号令を合図に、部員たちはグラウンドに向かって出て行った。

2日後の午後11時・・・聖タチバナ野球部ナインは船上の人になつていた。

「片倉あ・・・いったいどこに行くんだよ？」

「知らないよ、藤堂君・・・」

デッキで海風を浴びながらボーっとする渚に、半眼の藤堂が話しかけた。『橘の婚約者』である渚なら行く場所くらいは聞いていると踏んでいたのだが期待外れだったようだ。

「ところで浜名先輩は？さっきまで船から落ちそうな勢いではしゃいでいたけど」

「ああ。チビッコ先輩なら市川センセと奈良原と一緒に仲良く船酔いで寝てるよ」

2年生の浜名龍彦遊撃手は先輩らしからぬ子供っぽい人で、抜群の運動神経の持ち主だが守備の粗さが弱点である。

「さてさて、どこに行くのやら・・・」

〜1年目5月?〜（後書き）

もりむらまなせ
森村昌也

聖タチバナ野球部に就任したアマチュア球界屈指の名将。自他ともに認める『野球好き』で還暦を過ぎた今でも自らノックバットを持つ指導に当たる通称『静かなる情熱家』。捕手出身であり『チーム作りはまず捕手から』を持論とする。

モデルは西武ライオンズ（86年〜94年）・横浜ベイスターズ（01年〜02年途中）で監督を務めた森祇晶氏もりまきあき（旧名は昌彦）と南海ホークス（選手兼任で70年〜77年途中）・ヤクルトスワローズ（90年〜98年）・阪神タイガース（99年〜01年）・東北楽天ゴールデンイーグルス（06年〜09年）で監督を務めた野村のむら克也氏かつや。

両氏とも現役時代は捕手だった。

「1年目5月？」

地獄だ　　聖タチバナ野球部員の大半は、そう思った。まだ夏と呼ぶには少し遅い5月の日差しが注ぐ橘家所有の島に作られた多目的グラウンドに、ナインと監督、そして顧問の先生はいた。

「ほらほら、もうへばったのか浜名よ！まだ400本も打ってないぞ！？」

「く、くっそ……」

ユニホームを泥だらけにした浜名遊撃手が、森村監督をにらみつけながら起き上る。彼をはじめ、大京と片倉を除く野手陣は監督と1対1の500本ノックを受けていた。ちなみに大京と渚はノックを免除されたわけではない。彼らはグラウンドの片隅で素振り千本を絶賛実施中であつた。ちなみに素振りが終われば、彼らもノックを受ける。ちなみに投手陣は先生と一緒にランニング中だ。

しかし恐るべきはノックバットを握るこの還暦を過ぎた老人の体力の豊富さだ、と300本ほどでダウンした田中一塁手は思う。

「矢部……」

「なんでやんすか、田中先輩……」

田中の隣でへばっている矢部の隣には、二塁手の原に中堅手の峰、三塁手の藤堂に控えの奈良原も死屍累々の様相を呈していた。

「監督、もうたぶん千球は打ち込んでるはずだよ……」

「さらにこの後、大京君と片倉君にも500球くらい打つんでやんすよね……」

さらに午前中にはバッティングピッチャーとして全員にかなりの球数を投げているはずだが、ノックバットを握る老人からは疲労の色は微塵も見えない。

「なんかこう……」

「ほんとの野球好きって、監督のことを言うんじゃないっすかね……」

田中のつぶやきに、峰が続いた。

選手たちが疲れ果て、死屍累々と言った様相を呈して雑魚寝している頃（みずきは顧問の市川先生と一緒に女子部屋）、森村監督はいつも練習後に選手たちについて纏めている過去のレポートに目を通していた。

彼が見たところ、初めて会った時よりも選手たちは守備面で成長を示している。素人だった矢部や奈良原についても練習についてこれるくらいには成長してきているし、愛好会出身の2年生の田中や太鼓、浜名　特に元々守備がうまかった浜名は守備だけなら強豪校のレギュラークラスの力をつけていた。

「しかし・・・打撃に関してはな」

森村監督がいる2階の窓から見下ろした中庭では、片倉渚が素振りをしていた。チームの4番と頼む彼と3番の大京、そして5番を任せる予定の田中ぐらいいしか期待ができなかった。

「1番峰・2番原・3番大京・4番片倉・5番田中・6番浜名・7番藤堂・8番矢部・9番太鼓・・・か」

このチームで夏の甲子園をかけた予選を戦うか？それとも今回の大会は辞退して秋季大会に向けての練習に充てるか？理事長に問われたこの問いに、彼はもう答えを出していた。

「峰・原の俊足コンビで出たランナーを大京・片倉で返し、1・2点を守り抜く・・・これで行くしかあるまい」

この新米チームがどこまで行けるのか　それは、この合宿の出来如何にかかっている。

〜1年目6月〜

『ありがとうございますーっ!』

試合が終了し、ホームベースを挟んで両チームが礼をしてそれぞれのベンチに戻る。聖タチバナ学園高校野球部は、バス停前高校との練習試合を勝利で終えた。

ゴールデンウィークの合宿を終え、夏の甲子園地区予選を一月後に控えた聖タチバナ野球部員達は、初めての練習試合と比べて明らかにレベルが上がっていると片倉渚は感じていた。

・・・といっても初めが酷すぎたとは言えるが。

6月は雨が多い。一年で一番雨が多い雨季に当たるため、割を食うのが屋外で活動する部活動である。雨が降った6月のある日、野球部員たちは部室に集まって軽く体を動かしミーティングを行っていた。

と言っても、体を動かした後はみんな各々部室で駄弁っているのだが。今日は監督も所用でいないため、みんな好き好きに過ごしている。

「あれ、なっち（奈良原）と田中さんは？」

部室内に置かれたソファーに寝そべって占領しながら本を読んでいるみずきが、部室に置かれているトランプで矢部・原・藤堂と遊んでいる渚に問いかけた。

「えーと、奈良原君は塾で・・・」

「田中はんはデートです」

「ふーん。デート・・・つてデートお！？田中さんが!？」

2年生の田中誠一墨手は長身で口数が少ない人物である。みずきには部内でも少し影が薄い彼に彼女がいるとは失礼ながら考えられなかった。

「彼女さんとは幼馴染で、中学3年生の時から交際しているそうですよ」

「ほー・・・あのノツポ先輩がねえ。ボーっとしてるくせにちゃっかりリア充かよ」

難しい顔で手札を睨む矢部と、余裕の表情でガムを噛みながら行儀悪く藤堂が付け加える。

「むう・・・デート、デートねえ・・・」

彼女、橘みずきも野球に青春をささげているが、花の女子高生であることは変わらない。交際を始めた経緯がほかの子とは違うとはいえ、気になる男の子と彼氏彼女の間柄なのだから、時間が空いた時には一緒にどこかに遊びに行きたいと思うのは年頃の少女としては自然な考えであろう。

(でも・・・渚君のあんな姿見てたら、そんなこと言えないもんね・・・)

体育館の地下に造られたトレーニングルーム。主に運動部が筋力トレーニングに使用するための器具が揃っているこの部屋で、顔を紅潮させてバーベルを持ち上げ、必死の表情で筋力トレーニングに取り組む彼の姿を見ていたら、そんな我儘も言えなかった。

4番・捕手。攻守にチームを引っ張るポジションである。これはプロのチームでも変わりはなく、この二つのポジションに座る選手の実力が高いチームほど優勝に近いといっても言い過ぎではないだろう。出来たばかり、且つ素人も数名いるという状況で、チー

ム内における4番キャッチャー片倉渚にのしかかる責任感というのは重いものになってくる。

（「甲子園に行きたい」・・・か。渚君は本気でそれに向かって取り組んでくれているんだよね。私も頑張らないと）
みずきは踵を返し、彼に気が付かれないように去って行った。

帝王実業高校ていおうじつぎやうと言えば、全国でも五指に入る屈指のスポーツ強豪校である。その中でも野球部は幾度も甲子園に出場し、全国制覇を果たしたこともあるこのチームを長年率いる守木独斎まもりぎとくさい監督は、ブルペンで期待の1年生の投球に目を細めていた。

友沢亮投手ともざわりやう。140キロ後半のノビのあるストレートとスライダーを中心にした切れ味抜群の変化球が武器の本格派で、去年行われたリトルリーグ世界大会の日本代表にも選ばれて主戦投手として活躍。正捕手の片倉渚・主将の牧島勝三まきしまかつさむら塁手・一番打者の広田勇人ひろたはやく中堅手・抑え投手の榎豊えのきゆたかと並んで世界一に貢献した彼らを、アマチュア球界では『五人衆』と呼ぶ。

その投球を見守るのは監督だけではない。各プロ野球チームのみならず、メジャーリーグのスカウトも数人見受けられる。その中に、紫色のニット帽をかぶった中年男性がいた。彼の名は影山と言い、某プロ野球チームのチーフスカウトである。

（なるほど・・・確かに1年生ながら騒がれるほどの実力はある。即戦力と言っても言い過ぎではなからう。しかし・・・）
数多の埋もれた名選手を発掘してきた彼の眼には、ほかのスカウトとは違うように映っていた。

（投手としては即戦力ではない。プロで通用するには数年はかかるう・・・野手としてなら、1年目からでもスタメンに名を連ねることがができる）

友沢の右腕から放たれたボールがミットに吸い込まれる小気味いい音を背に、影山は踵を返して歩き始めた。

（帝王実業の友沢。パワフル高校の牧島に聖タチバナの片倉・・・来月から始まる地区予選が楽しみだな）

〓1年目7月?地区予選一回戦・VSバス停前高校(上)〓(前書き)

初めてケータイから文章を作ってみました・・・なかなか大変ですね。

く1年目7月？地区予選一回戦・VSバス停前高校（上）く

ついにこの日が来た。聖タチバナ学園野球部キャプテン太鼓望は、マイクロバスに揺られながら闘志を胸に秘めて先ほど終わったスタメン発表の最後の自分の名を反芻していた。

（9番ピッチャー太鼓・・・やっと、私の大好きな野球が始められるのですね）

元々聖タチバナに野球部はあったが、部員不足で彼ら2年生が入学する前に愛好会に降格。しかし、太鼓達はかつて世話になった先輩と一緒に甲子園に行きたいと思い、愛好会に入った。

しかし、結局人数を満たすことが出来なかった太鼓達は、戦うことなく引退する先輩達を見送るしかなかった。

彼らは口々に後輩の自分たちに感謝の意を伝えてくれたが、密かに男泣きに泣いていたのを太鼓達は知っている。

・・・戦わずして去った先輩達の分まで、俺たちが頑張ろう！
これが、太鼓達の誓いになった。

先攻：聖タチバナ学園スターティングラインナップ

1番センター峰・2番セカンド原・3番ファースト田中・4番キャッチャー片倉・5番レフト大京・6番サード藤堂・7番ショート浜名・8番ライト矢部・9番ピッチャー太鼓

後攻：バス停前高校スターティングラインナップ

1番ショート佐藤・2番ライト山田・3番レフト高橋・4番ピッチャー田中山・5番セカンド斎藤・6番センター伊藤・7番ファース

ト野田・8番キャッチャー小川・9番サード近藤

『よろしくお願いします!』

両チームが挨拶を終え、後攻チームが守備に散っていく。

「油断は禁物だぞ」

打席に立つ峰とネクストバッターズサークルに控える原以外のベンチに座る部員たちは声の主である森村監督に顔を向けた。

「ウチは練習試合で一度あちらに勝っているが、田中山君もあれから練習を積んだはずだ」

「確かになんだか田中山君から気迫みたいなのは感じます・・・」
森村監督と市川先生の言うとおり、聖夕チバナ学園は初回を三者凡退で終えた。

「みんな、気合入れて行こっ!」

『応っ!』

みずきの声援を背に、ナインはグラウンドに散っていく。キャッチャーボックスに座った渚はマウンドの太鼓から放たれるボールを受けながら、今日の調子を見極めていた。

(あまり球は走っていないな。緊張のせいかな、腕も縮んでいるし・・・)

「わっ」と

ストライクゾーンから大きくそれたボールを何とか捕球する。

「す、すみません」

(コントロールも悪い、と)

ボールを返すと主審からラスト1球が告げられる。「ラスト!」とボール回しに使っていたボールをベンチに返させ、二塁送球に備え

て原がセカンドベースに入る。

(ああもう、これが一番嫌やねん・・・)

この瞬間が、原の一番嫌な時である。その理由は

太鼓がボールを投じる。

キャッチャーミットにボールが収まる。

右手にボールを握り、捕手特有の小さなテークバックで投擲体勢に入る。

そして 放たれた矢の如き送球が過たず、原が構えたクラブに

寸分違わず収まった。一瞬声援が止み、ざわめきがスタンドを包む。

「~~~~~！渚のアホオ！練習ぐらいちったあ手加減したらどうやねん！」

「ごめんごめん！これでも7分だよお！」

クラブから手を抜き、真っ赤になった手を振りながら怒鳴る。渚は笑って弁明するが、「まだ7分」発言に、ざわめくバス停前ベンチ。若干テンションの下がった様子のバス停前サインを背に、渚の号令がグラウンドに響く。

「しまつていこーぜ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2306s/>

実況パワフルプロ野球～甲子園を目指す少年少女～

2011年11月29日02時48分発行